

演題番号：31

演題名：好酸球性胃腸炎の犬の2例

発表者氏名：筑網麻里絵 白永純子 白永伸行

発表者所属：シラナガ動物病院（山口県）

1.はじめに：好酸球性胃腸炎は消化管の慢性疾患で確定診断には病理診断が必要である。発症には免疫が関与している可能性があり、駆虫や食餌療法など原因に対する考慮が必要である。今回我々は好酸球性胃腸炎の2例に遭遇し若干の知見を得たためその概要を報告する。

2.症例：(1) W・コーギー、雄2歳、前日の嘔吐と黒色便を主訴に来院。胃内異物と診断し、開腹したが胃体部に潰瘍部を認め切除し、同時に幽門筋切開術を行った。病理検査では好酸球浸潤と肉芽形成を伴う胃潰瘍と診断された。術後3日目でバベシア症に陥り、治療後から除去食と対症療法を行ったが間欠的嘔吐を繰り返した。第186病日に試験開腹を行ったが幽門洞は肥厚硬結し、新たな潰瘍を形成していたため、幽門切除、再建術を行った。病理検査では胃潰瘍を伴う好酸球性胃炎と診断された。その後ステロイドで治療するもバベシア症を再発し、無治療では黒色軟便が見られたためメトロニダゾールに変更したところ、症状の緩解が得られた。第913病日のバベシア症再発の際に投薬を終了したが現在も経過良好である。

(2) チワワ、避妊雌2歳、体重1.4kg。避妊手術後間歇的な大腸性下痢が継続し、4ヶ月間対症療法を行う。その後右腰部に腫瘤が発生し絹糸膿瘍であったため、腫瘤切除と同時に遺残絹糸の除去のため試験開腹を行った。十二指腸と回腸の生検では好酸球性腸炎と診断された。治療としてメトロニダゾールを投薬したが、腹雷が継続するのでステロイドに変更して緩解が得られた。約2年経過する現在も経過良好である。

3.考察：消化管の生検は内視鏡による粘膜の採材が近年好印象を持たれている。今回の2症例は診断へのアプローチが非定型なため全層生検を行ったが、可能なら全層のほうが望ましいと考えられた。症例1ではステロイドがバベシア症発病に関連するためメトロニダゾールを使用した。有用であったと思われる。症例2では絹糸が関与した可能性も考えられ、原因排除と免疫抑制で症状を緩和させることに努めた。しかしメトロニダゾールでなくステロイドが効果的であったことから、薬剤感受性や好酸球性腸炎の程度が治療プロトコルに影響する事が考えられた。また清書とは異なり本2例において好酸球増加症は認めなかった。